

政治家に一言

去る5月26日、EU議会の議員を選ぶ選挙が行われた。この選挙にも、昨年3月から躍進が続くレーガ党（党首サルヴィーニ）が勝利を取めた。選挙後、レーガ党のコメントが流れた。「我々は選挙で勝利を取めた。法王は選挙で負けたのだ」という。このコメントはおかしいという反論が流れた。そこでは「法王は選挙に関係していないし、選挙についてのコメントも一切発していない。」「法王は今まで政治に関与したこともないし、これからはそれはないだろう。選挙についてのコメントも一切発したことはない。」「法王は『愛』の必要性、世界の人間の兄弟姉妹の大切さを説いているのだ。」などと言われた。法王はそれらの攻撃に対して、苦笑いをしながらも、正直に平和の精神を説いて自分の立場を守り続けている。法王の晴朗性、真実の働き、内部の信仰心の強固さ、これらはすべて自信をもって語られている。

ルーマニアへの司牧の旅の帰りの機内で、恒例の記者会見が行われた。あるジャーナリストの質問を記そう。「ローマへ帰着後、レーガのサルヴィーニ党首との謁見の機会を持つのか」という問いに対して、法王は会わないと答えた。つまり法王はサルヴィーニの謁見の申し込みを聞いていないのだ。秘書を通して謁見の申し出があれば、それに応ずるだろう。確かに、イタリアの首相コンテとは謁見した。これは正式に謁見の申し込みがあったからだ。実際に、サルヴィーニは謁見の希望を正式に申し込んでいなくて、SNSを通して「法王に謁見したい」と言っているだけだ。

法王の言葉は次の通りであった。「私は政治については全く無知である。特にイタリアの政治はわからない。確かに政治について勉強する必要はあるだろう。選挙の時の政治家の施政演説を聞いても、どこまで本気なのか、判断するのが難しい。私たちは政治家たちに正直であることを勧める。ウソつきであったり、ハッタリ屋であったり、スキャンダルを煽ったり、「恨み」や「恐れ」のタネを蒔くべきではない。」

法王はロムに謝罪

法王は司牧の旅として6月1日よりルーマニアを訪問した。ここ数世紀にわたって迫害や差別を受けてきたロマの人々に対して謝罪した。法王は次のように語った。「共産主義時代に殉教した9人の福者を祝福した後ミサが行われたが、その席上で、ロマたちはいわれなき迫害と差別を被ってきて、社会の一員として受け入れてもらえなかったのだ。カソリック教徒もその社会的傾向に加担してきたのだ。我々は一緒に歩むべきだ。お互いに兄弟心を持つならば、一緒に歩むべきだ。誰一人として後ろに残してはいけない。旅のモットーは一緒に歩むことで、巡礼するということは、少し雑然とした中に入って行くことだ。しかしその中に真の兄弟愛が芽生えてくるのだ。」

マリアに会える喜び

カソリックの巡礼の聖地としては、フランスのルルド、ポルトガルのファティマなどがよく知られているが、イタリアにも聖母マリアの巡礼の地として、アドリア海の中部地区にロレートがある。そこは盲目の人に霊験が現れるというのだ。その聖地ロレートに巡礼するために、多くの信者がマチェラータに集まり、一緒にロレートまで28キロを夜を徹して歩く。この行

事はすでに41年間続けられている。この運動の創始者、ジャンカルロ・ヴェチェリカ氏は41年前にこの巡礼を提唱し、自らも毎年参加している。同氏は現在79歳であるが、いつも列の最前列の中央に陣取り、28キロの道のりを踏破している。道中は歌や聖書の一部の朗読の放送があり、ともかく賑やかに行進は続いていく。今年の参加者は実に10万人に達した。この巡礼のために、3,000人のボランティア、315人の聖書の朗読者、10人の道案内人が動員されている。さらに照明関係者が180人、水・軽食の準備者が100人、救急隊員が500人、そして180人がハンディキャップのある人たち50人を運んでいた。

大人も子供も痛みを超えて

イタリアではこの1年近くの間、子供たちの心を傷める出来事が次から次へと起きた。昨年8月14日にはジェノヴァのモランディ橋が落下して43名の犠牲者を出した。橋の残った部分を6月全面的に解体し、新しく橋がかけられるように、工事を進めている。ジェノヴァは背後が山で、雨が降るとすぐに洪水となり、多くの犠牲者を出している。ナポリの近くのスカンピアには11歳のガブリエルが住んでいるが、彼は2013年のオナーニの大洪水で祖父のルチアーノを失った。彼によれば、その町では悪いことばかりが話されているという。法王は6月8日イタリア全土から、同じような境遇の子供たちを400人集め、子供たちに次のように話をした。「人生には、いろいろとある。楽しいことも悲しいことも辛いことも喜ばしいこともある。楽しいこと、喜ばしいことは幸せを感じるだろう。しかし大事なことは、辛いこと、悲しいことがあった時にどのように過ごすかということだ。その時には、子供も大人同様に、痛みや、苦しみを乗り越え、神の愛にすがり、兄弟が互いに助け合う必要がある。」

ノートルダム寺院復旧の費用は

4月15日に火災を起こしたパリのノートルダム大聖堂の復旧費用はどこにいつているのだろうか。火災があつてすぐに、いくつかの大企業は復興費用に必要な金額はいくら提供すると公言した。その全額を合わせると、8億5千万ユーロとなる。しかし、今までに集まったのはわずかに、その9%のみということだ。火災後初のミサは、6月15日の18時に行われた。まだ崩壊の可能性があるため、ミサへの出席者はわずか30名と限定され、参加者は皆ヘルメットをかぶって身の安全を考えて出席した。イタリアでは、蜜のあるところには蜂が集まるように、財源のあるところには金をうまく手にして、逃げる人がたくさんいる。ノートルダム寺院の復旧作業には、そういう現象が起こらないように祈るばかりである。

前法王の生活

前法王ベネディクト16世は、2013年に法王を退位してから、すでに6年以上過ぎたが、常にヴァチカンのサン・ピエトロ教会の裏側の住居に起居している。よく散歩をするが、その際ヴァチカンの庭園の中を歩いている。そして、あちこちに据え付けてあるベンチに座り、思索に耽ることもあるようだ。しかし、なるべく外へは出ないようにして、現法王に迷惑がかからないように注意している。たまに現法王が訪ねてくることもあるが、沈黙を守り、あまり話をしないようだ。